

大阪府松原市の松尾真澄 になることも多い。杉原さん(41)が飼うゴールデンレトリバーの「イーサン」(オス、13歳)は脚が不自出だ。大型犬に多い股関節の故障で8歳ごろから階段を嫌がるようになった。高齢ペットの訪問介護事業をしている杉原真理さん(44)に依頼し、介護やアドバイスを受けてきた。

一時は寝たきりになったが、後ろ脚を支えれば軽く動けるほど元気に。「マッサージはけっこう効果があります」と杉原さん。松尾さんは「仕事で忙しく寂しい思いをさせた時期があった。できる限りのことをしてあげたい」と語る。

犬や猫は7歳を超えるとシニアの仲間入りをすると病気が衰えから、食事や投薬、排せつでの介助が必要

人とペットの未来 ⑥



松尾さん(左)に飼い犬の介護をアドバイスする杉原さん(右) (大阪府松原市)

つ杉原さんは、自身の飼った犬が高齢になったことから民間団体の動物介護士の資格も取り、2008年に活動を開始した。これまでに約300件の高齢ペットの介護などにかかわった。ペットの寿命は大幅に延びている。

以前8〜9歳だったという飼った犬の寿命は室内飼いの普及などで延びた。ペットの医療保険を手掛けるアニコム損保によると、現在犬は14歳近く、猫はオス14歳、メス15歳ほどという。

寿命の延長は医療の高度化によることも大きい。埼玉県深谷市の「アニマルクリニックばやし」はコンピュータ断層撮影装置(CT)や磁気共鳴画像装置(MRI)を設置し、病気の診断などに役立てている。関西や北海道からもペットを運んだ人が訪れる。

「飼い主は人間と同じレベルの医療を受けさせたいと考えるようになって」と小林孝之院長。

延びる寿命 元気守る

広角鋭角

「人とペットの高齢化は歴史上経験したことのない事態。今後大きな社会問題にならないよう対応を考えねばならない」と語る。

大阪府守口市で動物病院を開いている石井万寿美院長は「7歳以上がシニアとすると、今や日本全国のペットの半分が該当する」と指摘。飼い主、ペットとも、元気に動ける健康寿命を考慮に入れながら、飼っているペットの種類や病気の予防を考える大切さを強調する。

小林院長は強調する。「自力で動ける期間をいかに長くするかが課題」という。